

國學院大學学術情報リポジトリ

〔報告2〕 健康体育学科はどうあるべきか：
令和元年度 國學院大學人間開発学会第十一回大会
シンポジウム報告：「人間開発」の再検討：
その原点と将来を見据えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 貢一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001406

〔報告二〕

健康体育学科はどうあるべきか

健康体育学科における議論の焦点

人間開発学部の中にある健康体育学科として、今後どうしていくかという視点について、学科連絡会における議論の成果を少しお話しさせていただければと思います。

健康体育学科の場合は、さきほどの渡邊雅俊教授の御報告にありましたが、教員養成を特色とする初等教育学科とは異なり、こういう職種を育てるという明確なビジョンが少し広い範囲に及んでいまして、そういったところの難しさについてが、健康

体育学科の中では議論の焦点だったような気がします。

職種で言うかどうかという人を育てたいのですか、というところにおいては健康体育学科教員の中でも一致していない部分があつて、その辺が難しいところでした。



これまでの議論では、人間開発学部の中の健康体育学科の今後十年間、これから先の方向性、それから売り。これは後の話なのですが、方向性について議論が行われました。

「指導者」か「専門家」か

まず、これは非常に難しいポイントなのですが、健康体育学科の教員が、或いは学生が目指す「人間開発」というのは何かということです。つまり、「人間開発」の理解というものが十分になされているかどうかというポイントがあるんですが、僕の理解では、「人間開発」というのは、人に対して、その人の「能力を開花させる」、或いは「引き出す」とか「開く」「拓く」ということだと考えています。

人に対して、その人の能力を引き出すということを考え、それを健康体育学科に当てはめると、一番分かり易いのが保健体育科の教員であつたり、スポーツの指導者だつたりという話になります。本学部設置当初のパンフレットなどをいろいろ見てみると、やはり、そういう色がかなり強く出ていました。

國學院大學人間開発学部健康体育学科教授 林 貢一郎

もうそろそろその辺を再考すべきなのかどうなのか、このままで行くのか、というのが一番の議論の中心となりました。

あえて「学部設置当初」を「昔」というイメージで表現しますと、学部設置当初における健康体育学科の育成すべき人物像としては、スポーツや運動についての知識を持ち、指導の能力を有する指導者、特に保健体育科の教員を中心とする「指導者」を育てたいのだということ。また、スポーツの実践現場で「手当て」ができるとか、人の気持ちも分かり、体のことも分かるといふ、そういう指導者です。

それから、國學院ですので、武道をはじめとする日本の伝統文化、さらには体育学というものを理解している、そういった指導者を育てる教育系学部の中にある健康体育学科という理解になります。人間開発学部というのは教育系学部であるという特色から、教員やスポーツ指導者、健康づくりの支援者、実際にスポーツを実践する人、こういった人を世の中に出していきたいということ。健康体育学科設置以来、この十年はそういうことでやってきています。

先ほどから何回もしつこいですが、育成すべき人材像として、このまま人間開発型「指導者」の養成で行くのか。それとも少し幅を広げて、スポーツに携わる指導者をサポートする人であるとか、或いは、物や環境をつくることでスポーツを支えている人であるとか、そのように少し範疇を広げると、対人ではなくて対社会、スポーツや体育や運動とか健康とかという観点から社会をつくっていく、社会を開いていくというようなスポーツや健康などの分野に携わる「専門家」という表現で行くのかという議論もなされました。

これまでの健康体育学科の教育目標と現実とのギャップ

こういう議論になった理由なのですが、実際に本学部のパンフレットでは、保健体育科の教員になりましたとか、健康指導ができる運動の指導者になりましたとかというふうに書いてあるのですが、実際に今の就職先等々を見ていても、それに当てはまる学生というのは二〇パーセントから三〇パーセントぐらいしかなくて、他の七〇パーセントぐらいの学生に関しては、全く関係のない所に就職するという現状があります。

これは、学生たちが四年間、スポーツ科学とか体育などの勉強をすることが嫌なわけではなくて、キャリアとして結局、他の所を選んでいくという現状があります。それゆえ、十年前に掲げたわれわれの目標、こういう人たちをたくさん世の中に出していきたいのだという、「指導者」を出していきたいのだという目標は、必ずしも達成されているとはいえない状況にあるのだろうと考えます。

多分、健康体育学科が養成したい人物像と、入学してきてくれた学生たちが将来になりたい人物像との間に、ミスマッチは大きいのではないかとこのように思います。

この原因として、第一に教育現場での、実際に保健体育科の先生になれと言っても、教育現場における教員採用人数が少なく、採用試験の倍率が十倍とか十五倍とかの地域もありますので、そこまで厳しいものにチャレンジする気になれないという人も多いでしょう。

それから、第二に学生のニーズが低いということもあるかも

しません。また、「指導者」なんかそもそも希望していないということがあるのかもしれませんが。では、なぜ本学科に入ってきたの、ということになるのですが。

第三に、これはわれわれ教員とか、カリキュラムなどのシステムを作る側の人間が反省しないといけないのですが、カリキュラムの中で能力を開花させられなかった、われわれがやっている教育、研究活動、そういったようなもので学生を刺激することができていなかったのではないかと思います。そういった方法で、そういうのに興味があるとか、そういうのが面白いとか、もっと勉強してみようとか、そのように思ってもらえるような教育、研究活動が果たしてできていたか、ということとで、その辺は少し反省しないといけないのではないかと思います。ふうに考えています。ネガティブな話ばかりになります。

というわけで、現状ではいろんな進路にいろんな学生が進んでいます。健康体育学科の学生たちはみんな「いいやつ」で、いろんな能力を持っていて、アクティブに自分の道を勝手に切り開いていくので就職「率」は好調なのですが、このような多様な進路は本学科の「中途半端」さを示しているともいえます。

また、日常的な授業においては少し修学意欲が低いとかというお叱りを受ける場合があります。無気力だとか、無反応だとかということが、最近ちょこちょこ言われるようになりました。

僕たちも十年間やってきて多少慣れてしまった、或いは息切れしているかもしれないし、設置当初の刺激はあるか、という点は反省しないといけないと思っていて、それが学生に伝わってしまった可能性はあるのではないかと思っています。

これまでの十年間を見て、では果たして最初のビジョンが達

成できたかというと、達成率は三〇パーセントぐらいだったでしょう、すなわち厳しく言えば、健康体育学科が目的としてきたような人材の育成はできなかった、ということになります。それゆえ、これからどうしていくかということが大事だということに考えています。

スポーツ・健康の価値を人に伝える

健康体育学科の議論の中では、「教職（指導者）VSその他」、要するに設置当初の、教職を中心とした指導者を養成する学科ということで押していくべきなのか、それとも、先ほど言ったように多少幅を広げて、スポーツで社会を変えていく、そういった人材を育てるというビジョンにするべきなのかという議論がかなりあって、結局、結論が出ないという状況になりました。ただ、実際にはVSではなくて、もともと教職課程を採る者はたくさんおり、先生になる者もたくさんいるので、教員養成の面それ自体を消すわけではないのですが、全体としてどちらにシフトしていくべきかいうところで、まだはっきりとこれで行きましようというところが出てくるわけではありません。

このように結論は出ていないのですが、これまで強調していた教員とかスポーツ指導者の養成という点ももちろん含めて、どういう人物像を世の中に出していきたいかということで、試みに少し広く「健康体育学科が望む人物像」を作ってみました。僕は、「スポーツ科学、健康科学や教育学などを学び、スポーツ・健康の価値を人に伝えることで世の中を変え、明るい未来を創造できる人物」を、健康体育学科では輩出していきたいとする

のがいいのではないかなというふうに思っています。

その中で進路としては、もちろん教員というのは非常にインパクトが強いというか、次世代の人たちの将来を担う仕事なので、教員が中心になるかもしれません。その他いろいろ、スポーツや健康に関する指導者も、企業でスポーツを支える人、健康管理者も、システムエンジニアやアナリストも、或いはライターや編集者、キャスター、広告関係者といったメディア系の人材も、もちろんスポーツの価値を人に伝えるという意味では非常に重要な仕事であると思っています。また、健康体育学科にはスポーツ推薦入試で入学している学生もたくさんいますが、スポーツの実践者も、それなりのリスペクトをされて、価値のある人物だと認識され、彼らが自信を持って、実践者としてやっていくということを支援するのも重要と思っています。

新カリキュラムに対する期待

というわけで、教職かその他かという議論はあるのですが、その話を取りあえず置いておいて、実際に令和二年度、来年からは健康体育学科に新しいカリキュラムが導入されます。

これはすでに決まっていることです。新カリキュラムでは、教職に関する科目は基幹科目から展開科目に移行します。展開科目はもとも四つだったのですが、五つ目を設けてここに教職の科目が移ることになりました。これに関しては、健康体育学科の外（学内）からは健康体育学科のイメージが変わってしまうのではという意見もあったのですが、これに変わります。だからといって、教職の色が薄くなるわけではありません。

それから、新しい科目として、外の世界とつながるということで、インターンシップを企画しています。それから、情報処理とか、スポーツを数値で分析するアナリティクスとか、或いはスポーツメディア論など、こういったようなスポーツに携わる仕事に関する授業が、来年入ってくる一年生から設けられます。それから、本年度より、「導入基礎演習」に加えて「専門基礎演習」が始まりました。ここはかなり期待しています。今まで二年生以上でやつてもらっていたことを一年生でやつてもらっても、全く遜色なくやれるということが現在進行形で分かっています。専門基礎演習によって、大学の学びというものが増え、充実していくのではないかと期待をしています。

人間の能力を拓き、健康を支え、そして社会を変える

今後の展望としては、これから十年間、健康体育学科そのものが実力をつけられるようにみんなで頑張っていきたいという事です。また、学生が実力をつけるための手段としては資格であるとか、いろんなイベントなどを積極的に活用していくということです。それから、研究室活動の充実ということも挙げさせていただきました。教員採用試験に合格する数も大事ですが、論文の数も大学だから大事なので、そういったようなことで、研究を通して学生をインスパイアしていくという必要がもつとあるのではないかと思います。

これは、ある健康体育学科の教員が言っていたのですが、学部や学科は「LUMINE（ルミネ）」みたいなもので、中に入っている店に魅力がないと、結局そこにはお客さんは来てくれない

ということなのです。なので、僕らはルミネの中の「BEAMS（ビームス）」か何だか分かりませんが、もっと魅力的な個人商店のレベルを上げていく必要があるでしょうというふうに考えています。そこで切磋琢磨していったって、学生も教員も、みんな育っていけないのではないかと考えています。

かつて本学科の藤田大誠教授は、「伝統的かつ最先端の体育や健康・スポーツ科学を兼ね備えた豊かなスポーツ・身体文化の「知」を活かしつつ、自らの「身体」を通じた積極的な実践活動に努める中で、主体的かつ総合的に運動・健康・社会の「開発」を目指すことのできる実践者・指導者」と書きました。広く言うと「人間開発」とは「人が持つ力や可能性を引き出し、伸ばしていく」もので「人づくりのプロ」を目指しているのですが、健康体育学科としては、対人だけではなくて、健康、或いは社会をつくっていく、開発していくような実践者、こういったような人材を出していきたいと考えています。

健康体育学科の目指す「人間開発」とはどういうものなのだろうかと考えたときに、スポーツや健康、教育や体育などの学問を十分に理解し、勉強して、その魅力を知って、人間の能力だけではなくて社会を開発する、すなわち人間の能力を拓き、健康を支え、そして社会を変えていけるような人材の育成に努めるべきなのではないかというふうに考えています。

教育とかビジネスとか、一本に決められないところが、健康体育学科の難しいところですが、学生が自分で選んでその道で頑張っていけるようなシステムを作り、こちらが決めるのではなくて、学生が自立して選んでいけるような、伸びていけるような環境をつくる必要があるのではないかと考えています。

